

『痴人の愛』を中心に、谷崎作品におけるファム・ファタール研究 —「移動」から見る権力—

A Study of Femme Fatale in Tanizaki's Works, Focusing on "Naomi"
—Seeing "Power" through "Movement"—

大野 愛結
Ayu Ohno

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：ジェンダー，セクシュアリティ，谷崎潤一郎
Key words：Gender, Sexuality, Junichiro Tanizaki

1. 研究目的

(1) 本研究の学術的背景

谷崎潤一郎の作品には、男性が女性に主導権を与える女性拝跪を書いた作品が多く存在する。ジェンダー・セクシュアリティ研究から、テキストに表出する女性像についての先行研究は数多くなされているが、谷崎の『痴人の愛』や『少年』をはじめ、数多く登場する娼婦的ヒロインにそれを紐づけて研究したものは少ない。娼婦的ヒロインはファム・ファタールと呼称され、男を破滅させる運命の女という意味を持ち、家父長制による良妻賢母像とは二項対立になっている。男性や、男性社会によって内面化されてしまった女性たちは良妻賢母であることを是としていたが、その一方でファム・ファタールという意志を持った女に対し性的な欲求と恐れからくる好奇の視線を向けていた。しかし、ファム・ファタールはミソジニーを背景とした近代の女性表象の定型であり、男たちを惑わす謎として内面を空白化され物語の装置として機能していると、内藤千珠子氏は先行研究で述べている。

(2) 本研究の目的および学術的独自性と創造性

『痴人の愛』はこれまで多数研究されてきた作品であるが、ナオミというファム・ファタールが装置として、テキストに、社会にどのように機能しているのかを研究したものは少ない。ジェンダー研究を色濃く織り交ぜ、谷崎のテキストに登場するファム・ファタールという空虚な装置が広く社会にもたらす意味を、現代の観点から研究する。

(3) 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

受動的な存在を能動的な存在であるように書くことで、ファム・ファタールという娼婦的ヒロイン像が出来上がり、そういった要素を持つ女性が蔑視する暴力性が社会に生まれる。谷崎の『少年』を中心に、力関係や社会的立場の弱い女性が、権力を手に入れるために性的な魅力を利用するとファム・ファタールとされるのではないかと卒業論文で定義したが、ファム・ファタールとして有名なナオミが登場する『痴人の愛』を中心に据えて現行のジェンダー・セクシュアリティ研究を織り交ぜて考えることで谷崎のテキストに登場するファム・ファタールという空虚な装置が広く社会にもたらす意味を、現代の観点で研究する。

2. 研究実施内容

R4.7 院生研究発表会で卒業論文から発展させた内容を発表し、教員と先輩方から助言を得た。修士論文の方向性を再検討する必要があると判断。卒業論文では谷崎潤一郎『人魚の嘆き』と『少年』を中心に、オスカー・ワイルド『サロメ』と比較しファム・ファタールという存在について研究した。

R4.8 院生発表会での助言を踏まえ、新たな文献や先行研究を加えて考察した。研究助成金で購入した学術書を用いてジェンダー論を中心に学習した。

R4.9 『痴人の愛』の先行研究を集めて精査しつつ、演習のため別の研究を進めながら方向性を探った。別の研究でもジェンダー論を中心とした。

R4.10 『痴人の愛』の先行研究を集めて精査。代表的な先行研究を調べる方法がわからなかったが機関誌『日本近代文学』『日本文学』に投稿されている『痴人の愛』先行研究をすべて確認するよう指導される。演習のため、別の研究を勧めながら修士論文の方向性を探った。

R4.11 修士論文第一回演習発表のため修士論文の仮段階を作成。テキスト内で、アメリカと西洋(ヨーロッパ)の概念的違いに注目する必要があると、指摘を受けて考えた。ヒロインであるナオミと他の女性登場人物を比較・分析することにより、ファミ・ファタールを論じるうえで説得力が増すと判断。

R4.12 修士論文の第一回演習発表を行った。教員から助言を受けて、1月に研究の為の課題をいただく。

R5.1 『痴人の愛』テキスト自体の研究を行い、軸として研究したい場面を抽出し、共通点でジャンル分けすることにより研究の方向性を再検討した。滞在する土地や住居の移動と、ナオミの衣服が着物から洋服へ変わる場面、また「夫婦」に求められる役割について語る場面から気になった部分を引いた。「移動」という要素に注目して論じる、という枠組みを中心に論を組み立てる。移動によって生じる力関係の変化、ファッションなど視覚的に確認できるもののレベルでの変化を分析していくことに決定。

R5.2 修士論文執筆計画の軸を決定し、教員から了承と助言を得た。

3. まとめと今後の課題

『痴人の愛』のテキストから、軸として研究する場面を精査・カテゴライズした。滞在する土地や住居の移動と、ナオミの衣服が着物から洋服へ変わる場面、また「夫婦」に求められる役割について語る場面から気になった部分を

引いた。「移動」という要素に注目して論じる、という枠組みを中心に論を組み立てることにし、移動によって生じる力関係の変化、ファッションなど視覚的に確認できるもののレベルでの変化を分析していくことに決定。

機関誌『日本近代文学』『日本文学』に投稿されている『痴人の愛』先行研究をすべて確認し、テキストにおけるアメリカとヨーロッパの概念的違いを検討、「移動」を巡る理論的な議論についても現行のものを確認することが課題。

ジェンダー・セクシュアリティ研究とメディア論等の方法論を織り交ぜて考えることで、谷崎のテキストに登場するファミ・ファタールという装置が広く社会にもたらす意味を、現代の観点で研究していきたい。

4. この助成による発表論文等

学会発表

[1]

発表者：大野愛結 森美幸

発表タイトル：「少年」から「悪女」へ——谷崎潤一郎が描く娼婦的ヒロイン像」

学会名：第65回日本文学専修 大学院研究発表会

発表年月日：2023年7月20日(木)

発表場所：大妻女子大学千代田キャンパス F644
(東京都・千代田区)

[2]

発表者：大野愛結 大野露井 川本直 山中剛史

発表タイトル：「谷崎潤一郎に流れるワイルドの文脈——ジェンダーとフェティシズム(仮題)」

学会名：日本ワイルド協会総会「ワイルドと日本文学(仮題)」

発表年月日：2024年12月7日(土)

発表場所：青山学院大学青山キャンパス(東京都・渋谷区)

(発表確定)

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB2302)『痴人の愛』を中心に、谷崎作品におけるファミ・ファタール研究」を受けたものです。